

第12話 編入試験（中学生）

いかがお過ごしでしょうか。9月も終わりに近づき、季節は秋と言いたいところですが、日本は豪雨や台風のニュースが多く、私の知っている秋とはずいぶん違っているような気がします。執筆現在、米カリフォルニアに住んでいますが、四季も無く少し寂しい今日このごろです。

読書、スポーツ、食欲と、いろいろ飾り言葉のある季節ですが、受験で言えば秋編入。ということで、編入試験について少し考えてみましょう。

中学1・2年生で帰国する生徒は、どのような立ち位置になるのでしょうか。どこかの学校に籍がある場合は別ですが、まずは地元の中学校に入学することになります。これまで見てきたように、中3以前の帰国では、帰国後1年～1年半という帰国枠に漏れてしまうことが多々あります。つまり、一般生として受験を意識しなければなりません。はっきりと言い切りますが、帰国生としては、中1～中2前半の帰国は避けるべきです。

とはいえ、帰国日などはそう選べるものでもありません。急遽帰国が決まってしまった…。予定よりも赴任が長くなった…。事情はそれぞれです。

公立の中学校はどんなところ？すぐに馴染めるだろうか。塾も探して…。先生は受験に詳しいのだろうか。悩みは尽きません。そこで出てくるのが、編入という選択肢です。

生徒数を調整するため、途中編入を受け入れている学校があります。毎年募集している学校もあれば、年によって行われない学校もあるため、まずは編入試験の有無を確認することからはじまります。夏ごろにホームページ上で発表されますが、試験内容等を聞き出せる場合もありますので、直接問い合わせるのが望ましいでしょう。

編入先としてよく名前のがる学校には、

渋谷

白百合

桐朋女子

お茶の水女子

などがあります。

募集の有無などは、お問い合わせください。

さて、後半で一つ言っておかなければならないことがあります。それは、編入試験は中々に厳しいということ。過去の一例ですが、中2の秋に帰国をし、一般入試で早慶に軒並み合格した生徒が、ある学校の秋編入に落ちていたことがあります。なぜそれほど厳しいのでしょうか。

理由の1つは、非常に枠が狭いということ。少ない枠を争うのですから、2倍・3倍の競争率ではなくなります。それに比例して難易度が上がるのは当然ですね。

2つめは、その試験内容。多くの学校では、定期テストの内容に準じて試験が行われているようです。

在校生に混ざるのですから、これは理にかなっています。

しかし、学生にとってはこれが苦勞の種になります。

編入を考えるような進学校は、とても早いペースで授業が進んでいます。進学校では代数と幾何、地歴や物理・化学、生物などを並行して行うことが多く、公立のカリキュラムより半年以上先取りしていることも多いです。これは、受験を見据えた塾の集団授業ではフォローをすることができません。学校の勉強と、塾の受験勉強、さらに編入対策となると、かなりの労力ですね。

さて、利点難点それぞれ挙げてみましたが、最後に一つ。

「大は小を兼ねる」という言葉があります。

一般入試を突破できる子は、帰国入試でも問題ありません。そのような子を、編入生としてでも学校は欲しがらるでしょう。こうして考えれば、自ずと優先順位は見えてくるのではないのでしょうか。ということで、編入試験を第一に考えない方がいいでしょう。学校に強い思い入れがある場合も、他の受験勉強と平行しなければいけませんので、最大限の努力をしましょう。逆にいけば、それができる子はどの学校でも欲しがらるに違いありません。

そこで、編入試験を選ぶメリットは大きく2つ考えられます。一つは、帰国受験を突破してきた子に合流できるということ。場合によっては、ライバルとして戦っていた子達かもしれません。意識を共有できることは、学校生活の助けになることも多いでしょう。

もう一つは、次の受験への準備期間が長いこと。帰国してすぐに高校受験の準備をするか、4~5年という時間をじっくり使って大学受験を見据えるか。

著者：谷口 仁
Sep 26 2016

